



TITLE:

# 女子傍尿道平滑筋腫の1例

AUTHOR(S):

松宮, 清美; 山口, 誓司; 長船, 匡男; 河西, 稔

---

CITATION:

松宮, 清美 ...[et al]. 女子傍尿道平滑筋腫の1例. 泌尿器科紀要 1988, 34(1): 181-183

ISSUE DATE:

1988-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119411>

RIGHT:

## 女子傍尿道平滑筋腫の1例

箕面市立病院泌尿器科 (部長: 長船匡男)

松宮 清美\*・山口 誓司・長船 匡男

河西泌尿器科医院 (院長: 河西 稔)

河 西 稔

## PARAURETHRAL LEIOMYOMA IN FEMALE: REPORT OF A CASE

Kiyomi MATSUMIYA, Seiji YAMAGUCHI and Masao OSAFUNE

From the Department of Urology, Minoo City Hospital

(Chief: Dr. M. Osafune)

Minoru KASAI

From the Kasai Urological Clinic

(Chief: Dr. M. Kasai)

A 50-year-old female visited our clinic complaining of tumor formation in the external genitalia. The tumor was elastic hard upon palpation, 3 cm in diameter, and located in the right lateral side of the external urethral meatus. The paraurethral tumor was excised. Histopathological diagnosis was paraurethral leiomyoma.

Female paraurethral leiomyoma is a rare benign tumor. There have been only 66 cases reported in the Japanese literature. We summarized these cases and studied their clinical features.

**Key words:** Paraurethral leiomyoma, Female

## はじめに

女子傍尿道平滑筋腫は比較的稀な疾患であり、現在まで66例が報告されているにすぎない。今回われわれは、50歳女性にみられた傍尿道平滑筋腫を経験したのでここに報告する。

## 症 例

患者: N.S., 女, 50歳

初診: 1985年12月7日

主訴: 外陰部腫瘍

既往歴・家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 帯下が増量しているのに気づき、1985年11月7日某婦人科を受診したところ、泌尿器科受診を勧められた。河西泌尿器科を受診し傍尿道腫瘍の診断でさらに当科を紹介された。頻尿、排尿障害、疼痛などは認めない。

現症・胸腹部理学的所見に異常なし。鼠径部リンパ節を触知しない。外陰部尿道右側壁に可動性のある弾性硬の鳩卵大の腫瘍を触知し、外尿道口は左方に偏位している (Fig. 1)。

入院時検査成績: 末梢血液 RBC  $444 \times 10^4/\text{mm}^3$ , Hb 13.6 mg/dl, Ht 40.4%, WBC 6,200/mm<sup>3</sup>, 分画異常なし。血液化学 Na 141 mEq/l, K 4.0 mEq/l, Cl 108 mEq/l, Ca 9.0 mg/dl, P 3.3 mg/dl, Uric acid 3.7 mg/dl, Cr 0.8 mg/dl。肝機能 TP 7.7 g/dl, Alb 4.6 g/dl, GOT 18 U/l, GPT 12 U/l,  $\gamma$ -GTP 61 U/l, ALP 95 U/l, LDH 230 U/l, T. Bil 1.0 mg/dl。検尿 Prot (-), Sug (-), pH 6.0, RBC 0~1/hpf, WBC 6~8/hpf。尿細菌培養認めず。止血・心電図・胸部レ線に異常なし。IVP 上部尿路に異常を認めず。膀胱鏡: 尿道の左方偏位のほかに異常なし。

手術所見: 1986年1月8日当科入院。1月10日、腰麻下に腫瘍切除術を施行した。まず尿道より膀胱にバルンカテーテルを留置したが、挿入は容易であった。外尿道口の右側壁で腫瘍直上に横切開を加え、腫瘍を

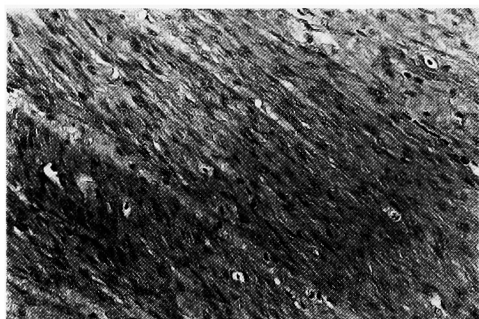
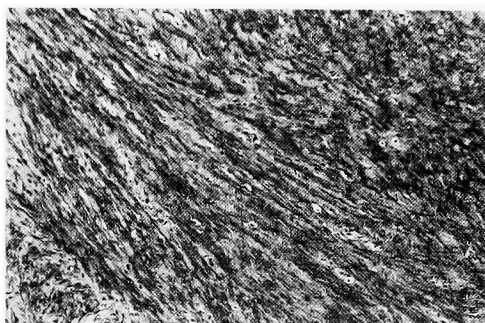
\*現: 国立大阪病院泌尿器科



Fig. 1. Photograph of external genitalia



Fig. 2. Macroscopic appearance of the tumor

Fig. 3. Photomicrograph of the tumor (H.E. stain  $\times 400$ )Fig 4. Photomicrograph of the tumor (azan Marolloy stain  $\times 200$ )

鈍的に剝離し摘除し得た。腫瘍は周囲組織との癒着を認めず、尿道との間の剝離も容易であった。摘除標本を Fig. 2 に示す。腫瘍は薄い結合被膜をもち、割面は灰白色、充実性で弾性硬、球形であり、大きさは  $3.3 \times 3.0 \times 3.0$  cm、重量は 11 g であった。

組織学的所見：組織学的診断は長紡錘形の細胞が束状に走行増殖しており、個々の細胞は長楕円形の核と好酸性の細胞質をもっている。核異型、細胞分裂像はみられない (Fig. 3)。Azan-Mallory 染色 (Fig. 4) で細胞質が赤色濃染されており、van Gieson 染色で黄色に染まる筋線維が認められ平滑筋腫と診断した。術後経過は順調で 1 月 22 日に略治退院となった。術後 1 年を経た現在まで再発は認めない。

### 考 察

女子尿道およびその近傍に発生する腫瘍は泌尿器科と婦人科の境界領域になっており、その名称も定まっていない。泌尿器科からは周囲組織、特に尿道との癒着の有無で尿道腫瘍か傍尿道腫瘍かを区別しようという意見もある<sup>1)</sup>。しかし、元来良性腫瘍はその発生母地となった組織との間に癒着を認めないのが普通であって、尿道との間の癒着の有無で区別するのは多少無理があるように思われる。今回われわれは泌尿器科からの報告を集計し、名称については便宜上武本<sup>2)</sup>の提唱に従い傍尿道平滑筋腫とした。

本疾患については林正<sup>3)</sup>が 1979 年に 34 例を集計し詳細な報告を行っている。それ以降われわれの調べ得たかぎりでは 32 例を数え、自験例が 67 例目にあたるものと思われる。自験例を含む林正以降の 33 例を Table 1 に示す。発症年齢は 18 歳から 77 歳までで平均年齢は 37.5 歳であった。ただ平均年齢については林正らは 35.9 歳としており林正以降の 33 例の平均は 40.2 歳であって垣本<sup>4)</sup>が言うように高齢者に多く認められるようになってきているようである。

主訴については今まで多くの報告者が強調しているように外陰部腫瘍が最も多く、記載の明らかな 61 例中 42 例 (69%) であった。排尿異常は 61 例中 16 例 (26%) と少なかった。ところが、欧米において 14 例を集計した Moopan ら<sup>1)</sup>の報告では、臨床症状として尿路感染症が最も多く 14 例中 9 例 (64.3%) を占めており、次に腫瘤触知の 7 例 (50%) となっており、本邦症例とはかなり異なっている。自験例においても尿路感染症の既往や排尿困難はともに認められなかった。排尿異常、主に排尿困難、尿閉などが生ずるのは内尿道口近辺にあるものが多く、おそらくは内尿道口の偏位、変形が伴って初めて排尿異常が生ずるものと思われる。腫

Table 1. Reported cases in the Japanese literature (after Rinshou's report 1979<sup>3)</sup>)

症例	報告者	年齢	主 訴	発生部位	大きさ (cm)	重量	形 状
35	木内	46	尿道出血	前壁	小指頭大	—	広基性
36	瀧原	34	外陰部腫瘍、性交時疼痛	後壁	4.5×3.5×3.0	22 g	楕円状
37	吉田	29	外陰部腫瘍	後壁	4.5×2.5×2.0	10 g	球 形
38	吉岡	19	排尿時痛、頻尿、残尿感	前壁	2.2×2.0	—	球 状
39	松田	32	外陰部腫瘍	後壁	6.0×5.5×4.2	67 g	有茎性
40	濃沼	32	外陰部腫瘍	前壁	5.5×4.5×3.0	45 g	楕円形
41	森山	53	性器出血	後壁	3.7×2.3	—	楕円形
42	山本	60	尿道口部腫瘍	—	3.1×2.2×1.0	—	—
43	青木	63	排尿時違和感	左側壁	2.0×2.0×1.4	—	楕円形
44	瀧原	43	外陰部違和感	後壁	2.0×1.7×1.0	3.5 g	楕円形
45	平賀	33	外陰部腫瘍、頻尿	前壁	—	7.1 g	—
46	谷川	43	外陰部腫瘍	後壁	3.5×3.0×2.8	16.5 g	—
47	能登	44	外尿道口部腫瘍	後壁	2.5×2.0×1.5	8 g	楕円形
48	清原	44	外陰部腫瘍	後壁	3.0×3.0×2.5	10 g	球 形
49	淡河	44	外陰部腫瘍	後壁	7×6×4	65 g	—
50	井関	32	外陰部腫瘍	前壁	2.9×1.8×1.6	9 g	球 形
51	新美	40	排尿時痛	前壁	拇指頭大	—	—
52	垣本	45	外陰部腫瘍	後壁	6.0×5.0×3.5	60 g	—
53	中村	33	外陰部腫瘍	右側壁	3.0×0.8×0.8	3 g	球 形
54	宮前	57	出血	後壁	5.5×4.5×2.5	33 g	—
55	小川	30	外陰部腫瘍、不快感	前壁	2×1×1	—	楕円形
56	中目	36	尿道出血	後壁	鳩卵大	—	—
57	〃	18	外陰部腫瘍	前壁	小指頭大	—	—
58	〃	46	尿道出血	右側壁	鳩卵大	18 g	—
59	井川	29	外陰部腫瘍	後壁	3.5×3.5×3.0	12 g	球 状
60	〃	34	外陰部腫瘍、尿失禁	前壁	3.0×2.5×2.0	10 g	卵円形
61	鍋倉	41	外陰部腫瘍	前壁	2.0×1.8×1.2	2.0 g	有茎性
62	川口	31	外陰部腫瘍、圧痛、出血	前壁	3.5×3.0×2.5	11 g	卵 形
63	宗像	53	頻尿、急迫尿失禁	後壁	4×4×3.5	24.9 g	—
64	住吉	45	外陰部腫瘍	後壁	8.4×5.0×3.2	86 g	—
65	前田	51	外陰部腫瘍	右側壁	12×8×6.5	340 g	—
66	塚田	36	尿線左方偏位	左側壁	小鶏卵大	36 g	—
67	自験例	50	外陰部腫瘍	右側壁	3.3×3.0×3.0	11 g	球 形

瘍重量については記載の明らかなもの 45 例でみると 2.0 g～340 g までで、その平均は 30.0 g であった。発生部位については前壁 23 例、後壁（尿道腔中隔を含む）28 例、側壁 9 例であった。治療については単純切除術が施行され、予後は良好であり再発は認めない。鑑別診断としてはカルンケル、尿道憩室、悪性腫瘍が挙げられるが病理組織学的にもこれらの疾患との鑑別は容易である。ただ、非上皮性腫瘍のうち線維腫との間の鑑別は筋成分の有無を見るため、H.E. 染色のみならず Azan-Mallory 染色、van Gieson 染色などを行ってみる必要がある。

#### お わ り に

傍尿道平滑筋腫の 1 例を報告し、本邦症例を集計、

検討した。

御校閲を頂いた恩師園田孝夫教授に深謝します。

#### 文 献

- 1) Mooppan MMU et al. Leiomyoma of the female urethra. J Urol 121: 371～372, 1979
- 2) 武本征人・高羽 津 女子傍尿道腫瘍の 1 例. 泌尿紀要 18: 847～850, 1972
- 3) 林正健二・松田公志：女子傍尿道平滑筋腫の 1 例. 泌尿紀要 25: 495～498, 1979
- 4) 垣本 滋・ほか：女子傍尿道平滑筋腫の 1 例. 西日泌尿 46: 1365～1368, 1984

（1987年1月6日受付）